



熊本風の会会長

船崎直一さん

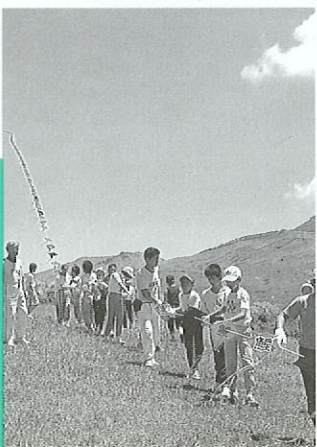


夏の阿蘇の空を風がにぎわすようになって今年で12年。毎年七月の最終日曜に行われる大阿蘇全国風あげ大会は、その名の通り全国から風好きたちが大集合。自慢の和風や創作風で観客を楽しませてくれます。この大会の実行委員会会長兼熊本風の会会長を務める熊本の風あげ界の中心的存在として活躍しているのが、船崎直一さん(50)です。放送局勤務に、グラフィックデザイナー、そしてこの風の会事務所の

運営と、目まぐるしい毎日を送っています。自宅の広いアトリエには、くるっと巻かれた大小の風が床の上や棚の上に、形もいろいろ、かなりの数が置かれています。
「この部屋の下地下室にも、たくさん放り込んでるんですよ。大会のたびに新しいのを二つ作りますから、全部で四百ぐらいあるかなあ。僕が風を始めたきっかけは、実は風あげが好きだから、という訳ではないんですよ。グラ

でっかい青空が 僕のキャンバス。

フィックデザイナーとして描く絵は、小さいのが多いものだから、でかい絵を描きたい、と思っていた頃のことです。ふと空を見上げたら、青空がとてつもない大きさのキャンバスに見えてきた。「このキャンバスに絵を描くとしたら風しかない。」と思い、さっそく自分の想いを描いた風を作りました。作っている時は大風だったのに、あげてみる



とボツンとした存在なんです。それで、今度は大勢で風をあげて空をうめつくそうと考へ、「熊本風の会」をつくり、阿蘇での大会を始めました。」昭和52年に阿蘇山の大観峰で開かれた第一回の大会には、参加者50人、観客四万五千人が集まり、現在では参加者が六百人にのぼる夏の風物詩になりました。船崎さんが火をつけた風あげ大会は、今では全国各地で開催されています。「阿蘇に追いつけ、追い越せ。」というのが各地の大会の合言葉になっています。そして大会ごとに招待をうけ、出向いていく船崎さん。最近では、アメリカや中国など、海外からも招待され、大忙しです。「日本風界のフナサキ」、といったところでしょいか。

「風にはいろんな力があるんです。例えば病弱だった人が元気になる。自分の作る風の形や絵を考えていると、フェイスが出てくるんですよ。あげる時に

は緑の中を走り、空を見上げるから背筋が伸びる。体力と精神力が必要とされるからおのずと健康体になるんですよ。それから、他人のことまで考えるようになり、他人の人格形成にもなるんですよ。風の会には小学生から90歳の方まで70人の会員がいるんですが、全員がボランティア精神を大切にしているのは、この会の自負するところなんです。」六月にはシンガポールで風をあげてきたそうですが、実はこれは船崎さんが企画した第一回アジア風あげ大会。目標はこの大会を、アジア各地の持ち回り大会にし、風の文化を末長く伝承していくとともに人々の親善をはかっていくことだそうです。「風は世界を平和にすることだってできるんですよ。」船崎さんは、瞳をきらきらさせた少年の心で語ってくれました。

